

企画・編集：田島廣之 埼玉医科大学国際医療センター 画像診断科

序 説

一昔前となってしまいましたが，2013年2月号の本誌Current Topics「NBCAを用いたIVRの実際：私はこうしている」で，以下の序文を書かせていただきました。

Interventional Radiology (IVR) に際して，n-butyl-2-cyanoacrylate (NBCA) を塞栓物質として使用することが日常的となってきた。しかしながら各施設においてその適応あるいは実際の使用法はバラバラであり，いまだ確たるエビデンスはない。先進的施設ではかなりのところまで適応を拡大し，特殊な使用法を用いて優れた成果を発表しているが，塞栓後の再開通あるいは合併症の報告も散見されるようになってきた。

今回の特集では，まず塞栓物質としてのNBCAを概説していただく。そして多くの症例を経験している施設から，それぞれの施設のポリシー，適応，手技の実際，合併症を中心として詳しく述べていただく。ページを十分にとっていただくことにより，多くの症例を掲載し，いいたいことはすべて述べていただく方針とした。

そのときのCurrent Topicsは3回にわたり掲載され，好評を博したものと記憶しています。

その後，関係各位の粘り強いご努力で，NBCAは2022年3月2日付で適応拡大の薬事承認を取得し，2022年9月1日付で特定保険医療材料ヒストアクリルとして収載されました。これにより，ようやく大手を振ってNBCAを使用できる環境が整ったといえます。実際に使用するにあたっては，適正使用指針に則り，e-ラーニングを受講，合格する必要があります。

NBCAは切れ味の鋭い日本刀のような塞栓物質で，その治療効果には絶大なものがあります。しかしながら，未熟な術者が使用するとおもね合併症を引き起こす危険性があります。

今回，実際にe-ラーニングを担当された方々を中心として，適応，使用法を中心とした手技の実際，合併症を避けるための工夫などにつき，総論，出血性病変，EVAR後のエンドリーク，経皮経肝的門脈塞栓術(PTPE)，血流改変，シャント疾患，血管奇形，頭蓋内・頭頸部病変の各項目に分けてご執筆をお願いしましたところ，期待以上の力作ぞろいとなっています。

初学者からベテランまで，すべての医師と医療スタッフに一読をお勧めいたします。

田島廣之